

# 知的障害児の話しことばに関する研究

## —(1) 正常児における自動詞と他動詞の分化の過程—

池 弘 子

### 〈はじめに〉

日本における幼児の言語発達に関する研究の大きな流れとして、語いの発達を扱ったもの（久保，1922；愛育研究所，1942；大久保，1967 など）と文法的な発達を扱ったもの（大久保，1973；高橋，1975；天野1976 など）がある。

語いの発達に関する研究により、語の初出年齢や使用語いの品詞分類による傾向、使用頻度の多い語いなど、多くの点が明らかにされてきた。

語い量は言語発達の重要な目安であり、正常児の語いの発達に関する研究は、障害児の言語発達の水準を知るうえでの資料となり、また、言語指導を行う際の手がかりにもなってきた。

しかし、文法的な発達に関する研究は、まだ言語指導に生かされているとはいえず、文法的・構文的な面の指導については、ほとんど手がつけられていない状態である。

これは、文法的な発達を取り上げた研究がまだ少ないこともあるが、障害児の言語指導が細かいステップを必要とするのに対し、正常児の発達が急速であるため、正常児に関する結果を生かしきれないということもあると思われる。

しかし、正常児の発達においても、焦点を絞ることにより、より詳細に発達を把握することができると考えられる。

井上（1976）は、名詞句＋「が」＋名詞句＋「を」＋述語から成る文を文の核として取り上げており、文法的な指導を行う場合、この文は中心的な文となると考えられる。この文で、助詞「が」と「を」は主語・目的語という文法関係を示す役割を果たしているが、この「が」と「を」の習得は、述語である動詞の自動詞と他動詞の分化と関係していると考えられる（池，1979）。

また、天野（1977）は、動詞の習得過程を、語い的な発達と文法的な発達が密接に結びついた過程であるとしている。

したがって、動詞の習得を発達的に把握することは、文

法的・構文的な指導を行う場合の基礎的な資料となり、今まで行われてきた正常児の文法的な発達に関する研究と言語指導との間を埋める資料となりうると考えられる。また、障害児の結果と比較することにより、その習得過程の特性を知るうえでの重要な手がかりにもなるであろう。

以上の点から本研究では、日本語の核となる文において使用される助詞、「が」と「を」の習得と関係があると考えられる自動詞と他動詞の分化を、正常児を対象として発達的に把握することを目的とする。

自動詞と他動詞の分化に関する研究には、天野（1977）がある。しかし、天野（1977）では、使用した文が助詞や主語が手がかりとなる可能性がある文のみであること、被験児群が幼稚園の年中児と年長児の2群であり、発達的に把握するには弱いこと、表現のみを取り上げていること、などの点で、言語指導のための資料とするには、情報量が少ない。

したがって、本研究では、語い年齢が4：0～7：11の幼児および児童を対象とし、助詞が手がかりになる場合とならない場合に分けて、自動詞と他動詞の分化を発達的に検討する。また、表現のみでなく、理解についても行う。

### 〈方 法〉

#### 1. 被 験 児

被験児は、絵画語い発達検査による語い年齢（以下VAとする）が4：0～7：11で、評価点が7～13、つまり同一生活年齢水準でその得点が1標準偏差内に入る幼児および児童で、大脳式精薄児用知能検査またはコース立方体組み合わせテスト（MA5：11までは前者、MA6：0以上は後者使用）とグッドイナフ人物画知能検査の少なくとも一方のIQが75～125の間にあるものである。

各被験児群と被験児数は、以下の通りである。

VA4：0～4：11（以下4歳児群とする）

男10名 女10名

VA5：0～5：11（以下5歳児群とする）

男10名 女10名  
VA6:0~6:11 (以下6歳児群とする)

男10名 女10名  
VA7:0~7:11 (以下7歳児群とする)

男10名 女10名  
各被験児群の詳細は、Tab. 1に示してある。

Tab. 1 被験児の構成

被験児群		4歳児群	5歳児群	6歳児群	7歳児群
被験児数	男	10名	10名	10名	10名
	女	10名	10名	10名	10名
VA	M	4:6	5:5	6:5	7:5
	R	4:0 4:11	5:0 5:10	6:0 6:10	7:0 7:10
CA	M	4:10	5:5	6:5	7:2
	R	3:10 5:5	4:6 6:5	5:7 7:5	6:2 8:0
大(ゴ)脇(ス)式(立)知(方)能(テ)検(ス)査	MA	M 4:4 R 3:8 5:4	M 5:2 R 3:8 8:5	M 6:4 R 4:4 15:6	M 8:0 R 4:10 12:10
	IQ	M 91 R 71~107	M 96 R 68~163	M 99 R 52~186	M 111 R 63~217
人物画知能検査	MA	M 4:10 R 3:10 5:11	M 5:5 R 3:6 7:1	M 6:5 R 4:11 8:1	M 7:3 R 6:8 8:1
	IQ	M 101 R 84~142	M 101 R 72~142	M 101 R 82~118	M 102 R 88~123

2. 実験材料

自動詞と他動詞の分化に関する課題文を表現は Tab. 2, 理解は Tab. 3に示す。理解には、助詞が手かかりとなりうる場合と、同じ文で助詞を聞き取りにくくして助詞が手かかりとなくなった場合が含まれている。Tab. 2とTab. 3の課題文は被験児が男児の場合の例であり、女児の場合は「男の子」の部分は「女の子」となる。

文を構成している名詞および動詞は、岩淵・村石編「幼児の用語」から選択した。これは、課題文で使用された名詞と動詞が、3名の幼児のうち2名以上が満5歳までに共通して使用し、使用回数も多い語であることを意味する。

Tab. 2 表現のための課題文(男児の例)

課題文の種類	課題文
り助 う詞 るが 課が 手 題が 文か り と な	窓が <input type="text"/> あいて <input type="text"/> います
	窓を <input type="text"/> あけて <input type="text"/> います
	すいかが <input type="text"/> われて <input type="text"/> います
	すいかを <input type="text"/> わって <input type="text"/> います
	積木が <input type="text"/> 並んで <input type="text"/> います
	積木を <input type="text"/> 並べて <input type="text"/> います
助 詞 が 手 か り と な ら な い 課 題 文	男の子が <input type="text"/> おきて <input type="text"/> います
	男の子が <input type="text"/> おこして <input type="text"/> います
	男の子を <input type="text"/> おこして <input type="text"/> います
	男の子が <input type="text"/> つかまって <input type="text"/> います
	男の子が <input type="text"/> つかまえて <input type="text"/> います
	男の子を <input type="text"/> つかまえて <input type="text"/> います
	男の子が <input type="text"/> かくれて <input type="text"/> います
	男の子が <input type="text"/> かくして <input type="text"/> います
	男の子を <input type="text"/> かくして <input type="text"/> います

(  が表現させる部分)

(1) 表現

Tab. 2に示した課題文と一致する絵(B5判の大きさ)を張ってある厚紙と、周波数300Hz以上をカットすることにより表現させる部分(Tab. 2の  の部分)を歪んで聞き取れなくして課題文を録音してあるテープを用いた。

(2) 理解

Tab. 3に示した課題文について、それぞれ、課題文と一致する絵1枚、課題文とは助詞と動詞の自動詞・他動詞が異なる文と一致する絵1枚、課題文と動詞も異なる文と一致する絵2枚の計4枚(各絵はB5判の大きさ)をランダムな位置に張ってある厚紙と、課題文を録音してあるテープを用いた。Tab. 3の  の部分は、表現と同じく300Hz以上をカットすることにより、助詞による手かかりをなくしてある。なお「おきる-おこす」のみは、男の子がおきている絵、女の子がおきている絵、男の子がおこしている絵(女の子をおこしている絵)、男の子をおこしている絵(女の子をおこしている絵)。

Tab. 3 理解のための課題文(男児の例)

課題文の種類	課題文
課題文 助詞を聞き取ることができる	窓があいています 窓をあけています すいかがわれています すいかをわっています 積木が並んでいます 積木を並べています 男の子がおきています 男の子がおこしています 男の子をおこしています
助詞(口の部分)を聞き取りにくくした課題文	窓 $\square$ あいています 窓 $\square$ あけています すいか $\square$ われています すいか $\square$ わっています 積木 $\square$ 並んでいます 積木 $\square$ 並べています

る絵)を1枚ずつ張ってある。

### 3. 手続き

#### (1) 表現

絵を提示し、「この絵の話が聞こえてきますから、よく聞いて言った通り言ってください。聞こえにくいところがありますが絵をみればわかります。」と言い、テープレコーダを聞くよう指示して、練習を行う。

練習後、テスト課題に入る。テープを聞いた後、なかなか答えない被験児、動詞の部分を自動詞・他動詞が異なる以外の動詞で答えた被験児には、実験者が自動詞と他動詞が共通する部分(たとえば、「つかまる-つかまえる」なら「つかま」の部分)まで繰り返す。反応しない、「わからない」と言う、聞き取れる部分を違えて言う、などの場合は、もういちどテープを聞かせる。

#### (2) 理解

絵を提示し、「この4つの絵のうちの1つの絵の話が聞こえてきます。どの絵でしょう。よく聞いて指さしてください。」と言い、テープレコーダを聞くよう指示して、練習を行う。

練習後、テスト課題に入る。反応しない、「わからない」と言う、課題文と助詞以外が異なる文と一致する絵を指さす、などの場合は、もういちど行う。

助詞の部分聞き取れなくしてある文を先に行う。

表現と理解は7日以上、30日以内の間隔をおいて、各被験児群とも半数ずつ異なる順序で実施する。

各課題文は、表現・理解ともあらかじめランダムな順序に並べてある。

## <結果と考察>

### 1. 表現

6組の動詞の自動詞と他動詞の分化の表現に関する結果を Tab. 4 ~ Tab. 9 に示す。

また、Tab. 4 ~ Tab. 6 で取り上げた動詞について、自動詞・他動詞ともに正答した被験児数を Fig. 1, Tab. 7 ~ Tab. 9 で取り上げた動詞について、自動詞・他動詞ともに正答した被験児数を Fig. 2 に示す。

Fig. 1 で使用した動詞(文)は助詞が手がかりとなりうる動詞(文)であり、Fig. 2 で使用した動詞(文)は助詞は手がかりとならない動詞(文)であり、逆に、助詞が表わす関係が理解できなければ正答することができない文も含まれている。

Fig. 1 の動詞で正答するためには、自動詞と他動詞で1度ずつ正答すればいいが、Fig. 2 の動詞で正答するためには、自動詞で1度、他動詞で2度正答しなければならない。

Tab. 4 ~ Tab. 6 から、6組の動詞とも、誤反応として自動詞と他動詞が異なる以外の反応をした被験児はほとんどいなかったことがわかる。

以下、Fig. 1 で取り上げた動詞(文)、Fig. 2 で取り上げた動詞(文)に分けて考察し、その後、全体的に検討する。

Tab. 4 「窓が  $\square$  あいて います」と「窓を  $\square$  あけて います」に対する反応

反 応	被験児群	4 歳 児 群	5 歳 児 群	6 歳 児 群	7 歳 児 群	
		い ま す	窓が $\square$ あいて	「あいて」(正反応)	19名	16名
		「あけて」(誤反応)	1	4	0	0
		その他(誤反応)	0	0	1	0
い ま す	窓を $\square$ あけて	「あけて」(正反応)	20	20	20	20
		「あいて」(誤反応)	0	0	0	0
		その他(誤反応)	0	0	0	0

Tab. 5 「すいかが **われて** います」と「すいかを **わって** います」に対する反応

反 応		被験児群				
		4 歳 児群	5 歳 児群	6 歳 児群	7 歳 児群	
わ れ て い ま す	す い か が	「われて」(正反応)	15名	20名	20名	20名
		「わって」(誤反応)	4	0	0	0
		その他 (誤反応)	1	0	0	0
わ っ て い ま す	す い か を	「わって」(正反応)	19	19	20	20
		「われて」(誤反応)	0	1	0	0
		その他 (誤反応)	1	0	0	0

Tab. 6 「積木が **並んで** います」と「積木を **並べて** います」に対する反応

反 応		被験児群				
		4 歳 児群	5 歳 児群	6 歳 児群	7 歳 児群	
並 ん で い ま す	積 木 が	「並んで」(正反応)	19名	18名	20名	20名
		「並べて」(誤反応)	0	0	0	0
		その他 (誤反応)	0	0	0	0
並 べ て い ま す	積 木 を	「並べて」(正反応)	9	13	18	19
		「並んで」(誤反応)	10	7	2	1
		その他 (誤反応)	1	0	0	0

Tab. 7 「～が **おきて** います」, 「～が **おこして** います」, 「～を **おこして** います」に対する反応

反 応		被験児群				
		4 歳 児群	5 歳 児群	6 歳 児群	7 歳 児群	
お き て い ま す	～ が	「おきて」(正反応)	20名	20名	18名	20名
		「おこして」(誤反応)	0	0	0	0
		その他 (誤反応)	0	0	2	0
お こ し て い ま す	～ が	「おこして」(正反応)	18	19	20	20
		「おきて」(誤反応)	2	1	0	0
		その他 (誤反応)	0	0	0	0
お こ し て い ま す	～ を	「おこして」(正反応)	18	19	20	20
		「おきて」(誤反応)	1	0	0	0
		その他 (誤反応)	1	1	0	0

Tab. 8 「が **つかまって** います」, 「～が **つかまえて** います」, 「～を **つかまえて** います」に対する反応

反 応		被験児群				
		4 歳 児群	5 歳 児群	6 歳 児群	7 歳 児群	
い ま す	～ が	「つかまって」(正反応)	3名	12名	13名	15名
		「つかまえて」(誤反応)	16	8	7	5
		その他 (誤反応)	1	0	0	0
い ま す	～ が	「つかまえて」(正反応)	18	16	19	19
		「つかまって」(誤反応)	2	4	1	1
		その他 (誤反応)	0	0	0	0
い ま す	～ を	「つかまえて」(正反応)	17	17	20	20
		「つかまって」(誤反応)	3	2	0	0
		その他 (誤反応)	0	1	0	0

Tab. 9 「～が かくれて います」, 「～が かくして います」, 「～を かくして います」に対する反応

反 応		被験児群			
		4 歳児群	5 歳児群	6 歳児群	7 歳児群
います が かくれて	「かくれて」(正反応)	11名	16名	18名	18名
	「かくして」(誤反応)	9	3	2	2
	その他 (誤反応)	0	1	0	0
います が かくして	「かくして」(正反応)	18	14	16	18
	「かくれて」(誤反応)	2	6	4	2
	その他 (誤反応)	0	0	0	0
います を かくして	「かくして」(正反応)	16	17	17	20
	「かくれて」(誤反応)	3	3	2	0
	その他 (誤反応)	1	0	1	0

(1) 助詞が手がかりとなりうる場合

Fig. 1では、自動詞と他動詞を間違えると助詞との関係で非文法的な文となり、助詞が手がかりとなりうる動詞(文)を取り上げている。しかし、自動詞と他動詞が分化していなければ非文法的な文としてとらえることはできない。

Fig. 1は、5歳児では、「われる-わる」の正答児数は19名(95%)と多いが、「あく-あける」は16名(80%)、「並ぶ-並べる」は11名(55%)であり、5歳児では、まだ自動詞と他動詞の区別ができていない被験児がかなりいることを示している。

しかし、6歳児では、「あく-あける」が19名(95%)、「われる-わる」が20名(100%)、「並ぶ-並べる」が18名(90%)となり、6歳になるとほぼ自動詞と他動詞が分化するといえることができる。

天野(1977)は、ここで取り上げた動詞(文)と同じ種類の動詞(文)で自動詞と他動詞の分化について調べており、「飛ぶ-飛ばす」、「まわる-まわす」、「われる-わる」の3組の動詞について、5歳前半では70~80%、6歳後半では95%が自動詞と他動詞を区別することができるという結果を得ている。この結果は、本研究の結果とほぼ一致している。

また、Fig. 1から、自動詞と他動詞の分化の時期は動詞によりかなり差があることが指摘できる。ここで取

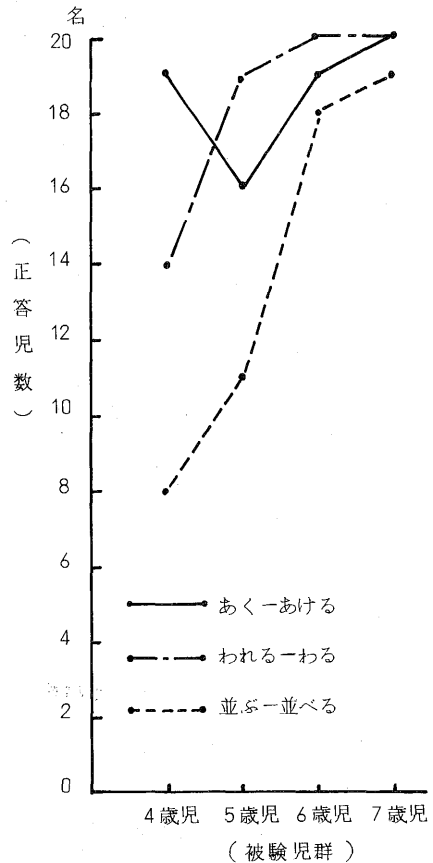


Fig. 1 「あく-あける」「われる-わる」「並ぶ-並べる」の表現の正答児数

り上げた動詞では、「われる-わる」がもっとも早く、次いで「あく-あける」であり、「並ぶ-並べる」がもっとも遅い。

Tab. 4~Tab. 6は、「あく-あける」では「あける」が、「われる-わる」では「わる」が、「並ぶ-並べる」では「並ぶ」が、正答児数が4被験児群とも18名(90%)以上であるのに対し、対応する自動詞または他動詞である「あく-あける」では「あく」が5歳児群で16名(80%)、「われる-わる」では「われる」が4歳児群で15名(75%)、「並ぶ-並べる」では「並べる」が4歳児群で9名(65%)であることを示している。

これは、自動詞と他動詞が分化していない場合でも、自動詞または他動詞の一方のみは4被験児群を通してほとんどの被験児が正答していることを示しており、自動詞と他動詞が分化していない場合、各被験児により、自

動詞を使ったり他動詞を使ったりするのではなく、動詞によって異なっているが、各被験児共通して、他動詞または自動詞で代表して使用する傾向があるということが出来る。

ここで用いた動詞といえば、「あくーあける」と「わかるーわる」は他動詞である「あける」と「わる」で、「並ぶー並べる」は自動詞である「並ぶ」で代表する傾向があるということが出来る。

(2) 助詞が手がかりとならない場合

Fig. 2では、助詞が手がかりとならない動詞(文)を取り上げている。

ここで取り上げた動詞は、各動詞について、①名詞+「が」+自動詞、②名詞+「が」+他動詞、③名詞+「を」+他動詞の3つの文がある。

①、②の文では、自動詞と他動詞を誤っても文法的には誤りとならないが提示された絵とは一致しない文とな

り、③の文では他動詞を自動詞に誤ると非文法的な文となる。

また、「つかまるーつかまえる」と「かくれるーかくす」の2組の動詞は、本研究では、①と③の文、たとえば「つかまるーつかまえる」では「男の子がつかまっています」と「男の子をつかまえています」の文、は同じ場面を表わしている。したがって、「つかまるーつかまえる」と「かくすーかくれる」は、①と③の文では、助詞「が」と「を」の表わす関係を理解していなければ、正答することができない。

このように、ここで取り上げた動詞(文)は、(1)で取り上げた動詞(文)よりもいくつかの点で正答するのがむずかしいと考えられる。

Fig. 2をみると、7歳児では、「おきるーおこす」は20名(100%)が正答している。しかし、「つかまるーつかまえる」と「かくれるーかくす」の正答児数は、それぞれ15名(75%)、16名(80%)と、「おきるーおこす」や(1)で取り上げた動詞(文)と比べると、7歳児ではまだ自動詞と他動詞の分化ができていない被験児がかなりいることがわかる。

「つかまるーつかまえる」と「かくれるーかくす」の自動詞と他動詞の分化が遅かったのは、すでに述べたように、この2組の動詞の場合、本研究では、名詞+「が」+自動詞の文と名詞+「を」+他動詞の文が同じ場面を表わしており、正答するためには「を」と「が」の表わす関係を理解していなければならないこと、また、一般的な状況でも、自動詞のみ、または他動詞のみで表現できることが多く、分化しにくい状況にある動詞であることの2点によると考えられる。

本研究でも、1度目の反応として、「～が つかまてて います」を「～を つかまえて います」と「が」を「を」に変えて答えた被験児が3名、「～を つかまえて います」を「～が つかまって います」と「を」を「が」に変えて答えた被験児が1名、「～が かくれて います」を「～を かくして います」と答えた被験児と「～を かくして います」を「～が かくれて います」と「が」を「を」、「を」を「が」に変えて答えた被験児が各1名ずつおり、自動詞または他動詞どちらか一方で表現する段階がある可能性を示唆している。

これらの反応は助詞も変化させており、文法的な誤りではなく、提示された絵と一致する文であり、自由な場面では正しい表現である。したがって、(1)で述べた自動詞か他動詞のどちらか一方を使用し、文法的に誤っているような誤反応の傾向とは異なっている。(1)で述べた傾向

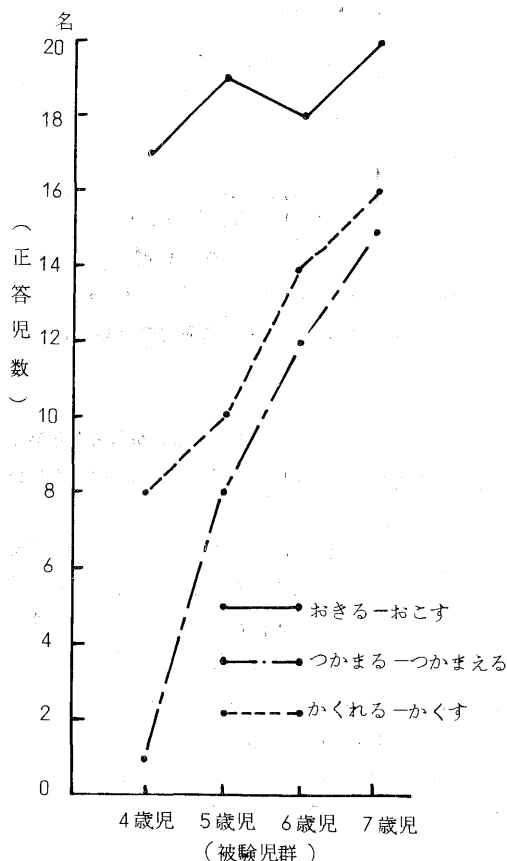


Fig. 2「おきるーおこす」「つかまるーつかまえる」「かくれるーかくす」の表現の正答児数

については後でふれる。

次に、Tab.7～Tab.9について検討する。

他動詞の場合、「を」とともに使われる場合と「が」とともに使われる場合があり、「を」とともに使われる場合、自動詞で答えるとは非文法的な文となるが、「が」とともに使われる場合は、自動詞で答えても文法的には誤りとはならない。

3組の動詞について、名詞+「が」+他動詞と名詞+「を」+他動詞を自動詞で答えた被験児数をみると、大きな差ではないが、4歳児群以外は、「が」とともに使われるほうが「を」とともに使われるより、自動詞で答えた被験児数が少なかった。「を」とともに使われる場合、自動詞で答えると非文法的な文となることの影響があるのかもしれない。

自動詞と他動詞の比較では、「つかまる一つかまえる」が4被験児群とも、「かくれる一かくす」が4歳児群のみが、自動詞の正答児数と他動詞の正答児数の差が大きく(4～15名)、いずれも自動詞の正答児数が少なかった。

また、(1)の動詞(文)でみられたような、各被験児が共通して他動詞または自動詞で代表して使用する傾向は、正答児数が少ない「つかまる一つかまえる」にみられる。「つかまる一つかまえる」では、他動詞の「つかまえる」を使用する傾向がある。

### (3) 全体的な傾向

Tab.4～Tab.9は、4歳児群で正答児数が75%以下であった動詞は、「つかまる」、「かくれる」、「われる」、「並べる」であり「並べる」以外はすべて自動詞であることを示している。

このことから、一般的な傾向としては、動詞は他動詞から自動詞が分化してくるのではないかと考えられる。

これは天野(1977)で、自動詞と他動詞を誤った被験児はすべて自動詞を他動詞としていたという結果と一致する。

5歳児群では、「が」とともに使用される他動詞の「つかまえる」と「かくす」、自動詞の「あく」と「並ぶ」の正答児数が、4歳児群より少なくなっている。

この5歳児群での正答児数の減少は、これらの動詞が、「あく」を除きいずれも、4歳児群で対応する自動詞または他動詞の正答児数が55%以下と少なく、5歳児群になるとかなり正答児数が増加しているのに比べ、注目される。

これは、自動詞と他動詞を1つの動詞としてとらえていたものが、分化するにしたがい2つの間で混乱が生じ、自動詞または他動詞で代表していたために正答児数が多

かった動詞は、正答児数が減少したものと考えられる。

助詞が手がかりになりうる場合と助詞が手がかりにならない場合の差は、ここでは明確にはならなかった。

つまり、助詞が手がかりになりうる場合の「並ぶ一並べる」と助詞が手がかりにならない場合の「つかまる一つかまえる」と「かくれる一かくす」は分化が遅く、一方に片寄ることはなかった。

「つかまる一つかまえる」と「かくれる一かくす」は分化が特に遅く、助詞と自動詞・他動詞の違いが同じ場面を表わしていることが関係している可能性がある。

そして、この「つかまる一つかまえる」と「かくれる一かくす」の2組の動詞を除けば、自動詞と他動詞の分化は6歳ではほぼ確実にできると考えることができる。

このように、動詞によって自動詞と他動詞を区別して使用できる年齢は異なるが、早い動詞では、4歳児でかなりの被験児が可能であり(85%～95%)、自動詞と他動詞を使い分ける基礎となる能力は、4歳でもう備えているといえることができる。

## 2. 理解

対応する自動詞と他動詞の理解の正答児数を Tab. 10 と Tab. 11 に示す。

「つかまる一つかまえる」、「かくれる一かくす」は助詞と自動詞・他動詞の違いにより同じ場面を表わしており、助詞の表わす関係の理解が自動詞と他動詞の理解に影響することが考えられるので、取り上げなかった。

Tab. 10の「あく一あける」、「われる一わる」、「並ぶ一並べる」は、正答以外はすべて対応する自動詞か他

Tab. 10 「あく一あける」、「われる一わる」、「並ぶ一並べる」の理解の正答児数

課題文		被験児群			
		4歳児群	5歳児群	6歳児群	7歳児群
あく一あける	窓があいています	15名	16名	18名	20名
	窓をあけています	17	16	19	20
われる一わる	すいかがわれています	15	18	20	20
	すいかをわっています	17	18	20	20
並ぶ一並べる	積木が並んでいます	16	17	19	20
	積木を並べています	18	16	20	19

動詞に誤ったものであるが、「おきるーおこす」の場合、他動詞は、誤答が必ずしも自動詞に誤っているとは限らず助詞の理解の誤りも含まれているので、Tab.11 の他動詞に誤答した被験児数は、自動詞に誤った被験児のみである。

Tab. 10から、対応する自動詞と他動詞の間の理解にはほとんど差がないが、「並ぶー並べる」の5歳児群と7歳児群以外は、すべて他動詞のほうが正答児数が多いか同じであることがわかる。

また、Tab. 11からも、やはり、他動詞を自動詞に誤った被験児より自動詞を他動詞に誤った被験児数が多いことがわかる。

表現においても、自動詞は他動詞から分化する傾向があったが、理解でも同じ傾向が認められた。このことは、表現で述べたように、はじめは自動詞も他動詞も他動詞で代表しているということだけでなく、理解の結果を考えると、他動詞的な観点がまずあり、その後、自動詞的な物の見方がでてくる可能性を示唆している。しかし、理解の場合は差が少なく、今後検討が必要である。

また、名詞 + 「を」 + 自動詞の文は非文法的な文となるが、Tab. 11の「～をおこしています」で、自動詞に誤った被験児がまったくいなかったのは、この点と関係があるのかもしれない。

Tab. 11 「おきるーおこす」の理解

課題文		被験児群			
		4歳児群	5歳児群	6歳児群	7歳児群
～がおきています	正答児数	11名	14名	17名	20名
	他動詞選択児数	9	6	3	0
～がおこしています	正答児数	13	16	20	20
	自動詞選択児数	2	1	0	0
～をおこしています	正答児数	11	15	18	20
	自動詞選択児数	0	0	0	0

Fig. 3は、自動詞・他動詞ともに正答した被験児数を示す。

表現と同じく、6歳ではほぼ自動詞と他動詞の分化が確実になるということが出来る。

しかし、表現と比較して、理解では動詞による差はみられなかった。

自動詞・他動詞の理解で助詞が手がかりとなっている

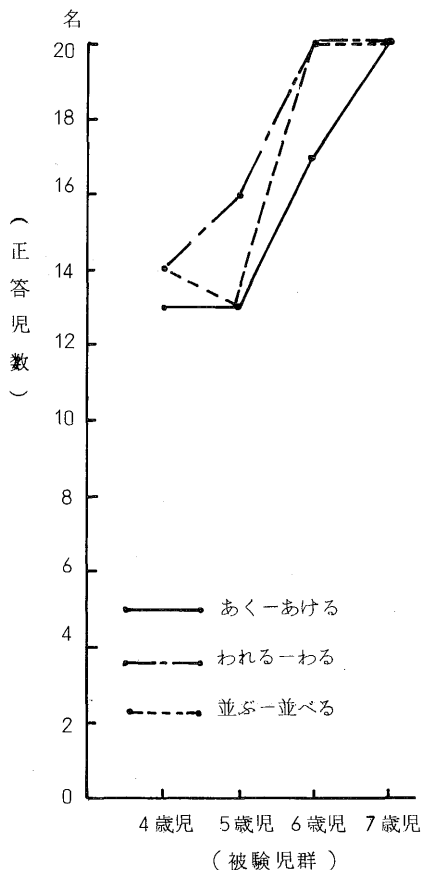


Fig. 3 「あくーあける」「われるーわる」「並ぶー並べる」の理解の正答児数

かどうかをみるために、助詞の部分聞き取りにくくし、助詞が手がかりにならないようにして理解を調べ、助詞があった場合と比較した。ここで使用した動詞(文)は、助詞が手がかりとなりうる3組の動詞(文)である。

手がかりとなる助詞があった場合に自動詞・他動詞ともに正答した被験児数と、正答したこれらの被験児のうち助詞が手がかりにならなくなった場合に誤答した被験児数を、それぞれの動詞(文)の組でだしたのが、Tab. 12である。

「わるーわれる」は助詞の手がかりがなくなってもほとんど正答児数に変化がないが、「あくーあける」と「並ぶー並べる」では、かなり差があった。

「わるーわれる」は、Fig. 1とFig. 3からわかるように、表現においても理解においても、6歳児群からは全被験児が正答できるようになっている動詞である。



Tab. 12 助詞が手がかりとなりうる課題文と  
助詞が手がかりとならない課題文の  
理解

被 験 児 群		4 歳 児群	5 歳 児群	6 歳 児群	7 歳 児群
あくーあける	①助詞が聞き取れる 課題文の正答児数	13名	13名	17名	20名
	②①のうち助詞が聞き 取れない課題文 で誤答した被験児 数	3	5	5	4
わかるーわかる	①	14名	16	20	20
	②	1	2	0	0
並ぶー並べる	①	14	13	19	19
	②	4	0	3	2

助詞の手がかりがない場合でも「わかるーわかる」は6歳児群から全被験児が正答しており、「わかるーわかる」は6歳で完全に自動詞と他動詞が分化するといえることができる。

(3)の表現と理解の関係で示すが、全体的にみて、「わかるーわかる」は表現と理解の差がほとんどなく、「あくーあける」と「並ぶー並べる」は差が大きい。

これは、「あくーあける」と「並ぶー並べる」の場合は、表現または理解に正答している被験児が必ずしも自動詞・他動詞の区別が確実であるわけではないことを示しており、それが、助詞の手がかりがなくなった場合の正答児数の減少となって表われたと考えられる。

したがって、自動詞と他動詞が確実に分化していない場合、助詞は、自動詞と他動詞を区別する手がかりとなりうるといえることができる。

### (3) 表現と理解の関係

「あくーあける」、「わかるーわかる」、「並ぶー並べる」の3組の動詞について、自動詞・他動詞ともに正答した被験児数を、表現と理解に分けて、Fig. 4~Fig. 6に示す。

Fig. 4~Fig. 6は、傾向として、「あくーあける」は表現のほうが正答児数が多く、また、「並ぶー並べる」は理解のほうが正答児数が多いこと、そして、この差は4歳児群で大きいこと、「わかるーわかる」は表現と理解にほとんど差がないことを示している。

この、動詞による表現と理解の関係の違いは、3組と

も理解にはほとんど正答児数に差がなかったことから、表現の差からくるものと考えられるが、なぜ理解には動詞による差がなく、表現にあるのかは、不明である。

ただ、(2)の理解で述べたように、表現または理解が正答であっても、必ずしも自動詞と他動詞の分化ができていないとはいえないことは指摘できる。

また、表現と理解の関係は、動詞により、表現が正答児数が多い動詞と理解が正答児数が多い動詞があり、一定でないことも指摘できる。

3組の動詞すべてに正答した被験児数を表現と理解に分けて示すと Fig. 7となる。

表現と理解の間にはほとんど差はない。

表現は、正答児数をもっとも少ない「並ぶー並べる」と各被験児群ともほぼ同じ正答児数であるが、理解は、3組の動詞で共通している正答児数とは異なっている。

つまり、理解は、被験児により正答する動詞が異なっていると考えられ、全体として、自動詞と他動詞の分化をみれば、表現と理解の間に差はないといえることができる。

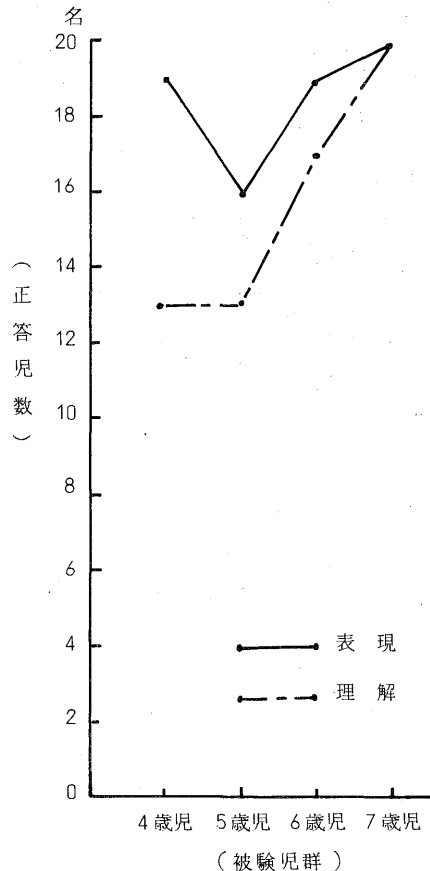


Fig. 4 「あくーあける」の表現と理解の  
正答児数

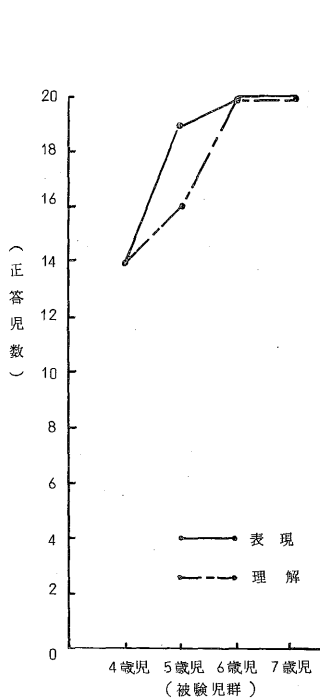


Fig.5 「われる-わる」の表現と理解の正答児数

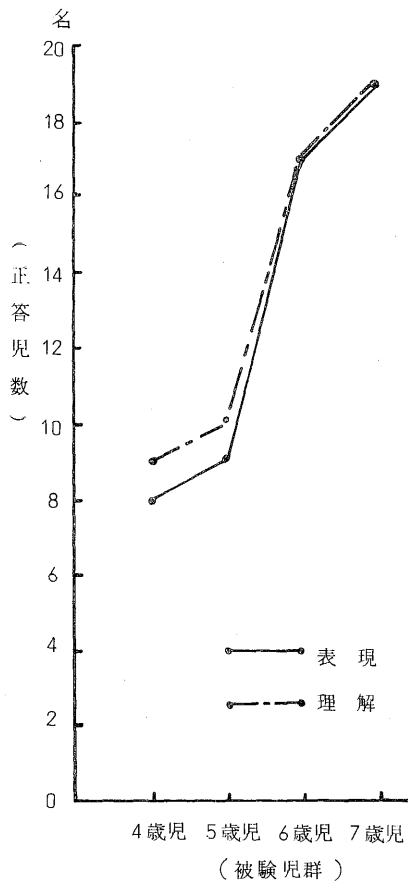


Fig.7 「あく-あける」「われる-わる」「並ぶ-並べる」の表現と理解の正答児数

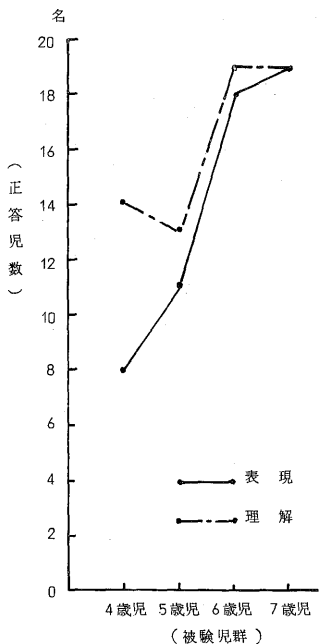


Fig.6 「並ぶ-並べる」の表現と理解の正答児数

### 〈結論〉

障害児の言語指導のための基礎的な資料とし、また障害児の言語の習得過程の特性を知るうえでの手がかりとするために、語い年齢が4:0~7:11の正常児を対象として、自動詞と他動詞の分化を発達の的に検討した。その結果、以下の点が明らかになった。

#### 1. 表現に関して

- (1) 自動詞と他動詞の分化は動詞によって異なるが、6歳にはほぼ確実にになっている動詞が多い。
- (2) 自動詞と他動詞が分化していない場合、他動詞で代表して使用する傾向がある。
- (3) 分化の早い動詞では4歳ではほぼ自動詞と他動詞の使い分けが可能であり、自動詞と他動詞の分化の基礎となる能力は4歳ですでに備えていると考えられる。

## 2. 理解に関して

- (1) 自動詞と他動詞の分化の動詞による差はあまりみられず、6歳ではほぼ確実となる。
- (2) 動詞の分化が確実でない場合、助詞が手がかりとなっている可能性が考えられる。

## 3. 表現と理解の関係に関して

- (1) 動詞により、表現が正答児数が多い動詞と理解が正答児数が多い動詞があり、表現と理解の関係は複雑なようである。
- (2) 表現と理解で共通して使用した6組の動詞すべてに正答した被験児数を比較すると、表現と理解の間にほとんど差はない。

## 参 考 文 献

- 1) 愛育研究所編，幼児の言語発達．目黒書店，1943.
- 2) 天野 清，幼児の文法能力．東京書籍，1977.
- 3) 池 弘子，知能障害児の話しことばに関する研究 — 助詞の使用に関して —．心身障害学研究，1979，3，57—66.
- 4) 井上和子，変形文法と日本語・上．大修館書店，1976.
- 5) 岩淵悦太郎・村石昭三編，幼児の用語．日本放送出版協会，1976.
- 6) 久保良英，幼児の用語の発達．児童研究所紀要，1922，5，137—299.
- 7) 大久保愛，幼児用語の発達．東京堂出版，1967.
- 8) 大久保愛，幼児の文構造の発達 — 3歳～6歳児の場合 —．秀英出版，1973.
- 9) 高橋太郎，幼児語の形態論的な分析 — 動詞・形容詞・述語名詞 —．秀英出版，1975.

# A Study of Speech in mantally retarded children

## — I. The differentiation process of intransitive and transitive verb in normal children —

Hiroko Ike

The purpose of this study was to examine the differentiation of intransitive and transitive verb develomentally in normal children. The results of this study would be useful as the basic data for the languge training of mentally retarded children.

Subjects were 80 normal ehildren with a vocabulary age (VA) from 4:0 to 7:11.

For the production, 15 incomplete sentences lacking of verbs were presented to subjects by taperecorder with picture card. Then, subjects were asked to repeat the complete sentence after each presenting of stimuli.

For the comprehension, 9 complete sentences and 6 incomplete sentences lacking of JOSHI(particles)(removing the cue of JOSHI) were presented to subjects by taperecorder with 4 picture card for one sentence. Then, subjects were asked to select the most appropriate picture card.

From the results of this experiment, it would be concluded as follows :

### 1. Production

(1) The age of differentiating of intransitive and transitive verb was variable on each verb. Most subjects VA from 6:0 to 6:11 were able to grasp the difference between intransitive and transitive verb almostly.

(2) When subjects didn't grasp the difference between intransitive and transitive verb, they had a tendency to use

transitive verb.

(3) Most subjects with VA from 4:0 to 4:11 were able to comprehend the difference between intransitive and transitive verb of only one or two verbs. It was suggested that they had fundamental ability necessary for the differentiation of intransitive and transitive verb.

## 2. Comprehension

(1) The age of differentiation of intransitive and transitive verb was not so various on verbs which were used in this study. Most subjects with VA from 6:0 to 6:11 were able to comprehend the difference between intransitive and transitive verb.

(2) When subjects didn't comprehend the difference between intransitive and transitive verb, they might use the JOSHI as a cue.

## 3. Relation of production and Comprehension

(1) For some verbs, production was more easy than comprehension, and for the other verbs, comprehension was more easy than production, so that the relation of production and comprehension was complicated.

(2) There were little differences between production and comprehension in comparison with subjects who respond rightly to all verbs which were used in both production and comprehension.